



## マリー・キュリーのキャリアに見るジェンダーと科学の問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 慶子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/14521">http://hdl.handle.net/10466/14521</a>

## 第2回講演

# マリー・キュリーのキャリアに見る ジェンダーと科学の問題

川島 慶子

こんにちは。名古屋工業大学の川島です。

2010年にマリー・キュリーの本（『マリー・キュリーの挑戦——科学・ジェンダー・戦争』、トランスビュー）を出したということで、お招きいただきました。2010年の出版ですから、もちろん福島原発の問題とは関係なく、副題にありますように「科学・ジェンダー・戦争」ということで書いた本です。しかし3.11から、受け取り方が変わってきてまして、放射能の問題を扱った本としても注目されてしまいました。

今回は、福島問題とは無関係とは言いませんが、もともとの主題に戻りまして、キュリーのキャリアから見た、ジェンダーと科学の問題についてお話ししたいと思います。

## 1 マリー・キュリー：大成功した「女性」科学者

マリー・キュリーというのは、知らない人はいないほどの大物です。1867年生まれで、1934年に66歳で亡くなっています。この人は、近代大学成立以降に出現した最初の国際的な女性科学者です。なぜわざわざ「近代大学」と断るかという、大学という制度は中世にヨーロッパで誕生しましたが、その時は非常にキリスト教の影響が強いものでした。この関係から自由になったのが近代大学です。したがって、明治時代に日本が西洋を

真似て作った大学は「近代大学」の方です。つまり、マリー・キュリーは宗教性のない大学で教育を受けた、最初の国際的な女性科学者なのです。



マリー・キュリー

その国際性がどのぐらいすごいかというと、たとえば1903年にノーベル物理学賞を夫妻で共同受賞しています。さらに単独で1911年にノーベル化学賞を受賞しています。最近科学系のノーベル賞は、まず単独では受賞しません。文学賞はともかく、科学の方はほとんど共同ですが、11年は一人だけです。

昨年の2011年には、マリー・キュリーがマスコミにたくさん登場しました。じつは昨年は世界化学年で、マリー・キュリーはそのマスコットだったのです。つまり彼女の化学賞単独受賞から100年後を記念の年にしたのです。ちなみに世界物理学年のマスコットはアインシュタイン、天文学年はガリレオです。つまりマリー・キュリーはそのくらい大物なのです。

生前に、例えばフランスでは「一般には科学的発展に対して無関心な国民層にまで非常に深く浸潤している名声」<sup>1)</sup>とまで言われました。要するに、誰でも知っているということです。科学に何の興味もない人でも知っているくらい有名な人でした。

ほかにも卓越した女性科学者はいますが「あなたの知っている女性科学

者の名前を書きなさい」と言うと、キュリー夫人と答える人が圧倒的に多いです。なぜ、この人だけがこんなに有名なのでしょうか。あるいは、19世紀に生まれた人が、なぜこれだけ成功したのでしょうか。今日はこういう点からマリー・キュリーについて考えていきたいと思います。

ここで私が注目したのは、話が飛ぶように見えるかもしれませんが、北原みのりさんの『アンアンのセックスできれいになれた?』という本のあとがきです。ここで北原さんは、例の東電OL事件の被害者の女性と、公金横領という嘘の嫌疑をかけられながらも、ついに冤罪を晴らした村木さんという2人の女性を比較しています。2人ともキャリア女性ですが、そのサバイバル方法は対照的です。そして片方は最終的に事件に巻き込まれて殺される、もう片方は無実を立証して牢屋から出てくる。何が違うのか。この人たちの名声は、もちろんキュリー夫人とは比べられませんが、生き残るキャリア女性の秘訣というか共通点があるのではないかと私は考えました。北原さんの感想はこうです。

村木さんのやり方が「賢かったから」というだけではない。東電OLが「間違っていた」からじゃない。お茶くみを率先してやりましょう、という話ではない。「低い目標設定」をすることと、この社会に絶望し「諦める」ことは全く違う。諦めず、自分を活かすため、東電OLになく、村木さんが持っていたものは何か、ということだと思う。

村木さんは、裁判で戦い抜くことができた理由について、江川紹子さんという、オウム事件でよく出てきたルポライターに、こう話したそうです。

「気持ちが折れない、健康で体力が続く、いい弁護団に恵まれる、自分の生活と弁護費用をまかなえる経済力がある、家族の理解と協力を得られる、という5つの条件が揃う幸運に恵まれないと戦えないんです」

東電OLになく、村木さんが持っていたもの。村木さんの穏やかなパーソナリティだけでは説明できない。女がこの社会で生き抜くための条件が全部ここにあると思った。

それは折れない気持ち。

それは体力。

それは友だち (=自分の理解者)。

それは経済力。

それは家族の理解と協力。

そして、この5つが揃う幸運。

東電OLは、経済力があつた。経済力しかなかった。

そんな東電OLの死に、真正面から向き合うのに、私は本当に時間がかかった<sup>2)</sup>。

その折れない気持ち、体力、友だち、経済力、家族の理解と協力。これは確かに、女がこの社会で生き抜くための条件だと思います。そしてこれはいまの日本だけではなく、マリー・キュリーの生きた時代もやっぱりそうなのではないかと思いました。それでは今からみなさんと一緒に、この女性の生涯を見てゆきたいと思います。

私が描きましたマリー・キュリーの漫画 (26、27頁) を見てください。これを見ると、子ども時代はあまり楽しい感じではないですね。マリーは1867年ロシア領ポーランドのワルシャワ、つまり被占領国に生まれています。しかも8歳でお姉さんが、10歳でお母さんが死んでと、次々と家族が死んでいます。一見悲惨な環境で、だから非常に苦勞して立身出世した人として語られます。しかし、実はマリー・キュリーも村木さんと同じで、先の条件がそろっていたのではないか。そういう意味では恵まれていたのではないかと思いました。たとえば先進国のお金持ちの家に生まれるというのは、一見いい条件ですが、そうでなくても、マリー・キュリーには何か決定的なものがあつて、じつは恵まれていたのではないかと私は考えました。

たとえばマリー・キュリーが1891年にソルボンヌ大学に入学したとき、ほかにも女子学生はいたはずです。一人ではない。なのにこの人だけが大成したとしたら、マリーには他の女子学生と違う何かがあつたに違いない。それについて考えてみよう。それは、いまの日本の男女共同参画社会の中で女性の能力を生かすことの何らかのヒントになるであろうと考え

ました。

もう一つ私が考えたのは「時代」です。折れない気持ちや体力などは自分の側の問題ですが、自分の外の問題である「時代」というのもマリー・キュリーの味方をしたのではないかと思いました。なぜかと言いますと、湯浅年子という女性科学者のことが思い出されたからです。湯浅はマリーより後の時代、明治42年（1909）に東京の士族の家に生まれてフランスに留学し、マリーの娘婿であるフレデリック・ジョリオ＝キュリーに師事して学位を得た後、フランスで正規の職を得た最初の日本人科学者となり、1980年にパリで亡くなりました。時代を考えれば大出世です。ただ、この人の場合は留学前後の大事な時期に第二次世界大戦が入っています。このときのことを、後で本人がこんな風に残しています。

私は日ごろ、教育によって人間の能力が（知識は別として）どの程度のばし得るものなのか大変疑問に思っている。むしろ悲観的であるが、ただ人間の才能や人格が自然に発露し、発展するのを妨げる条件が、いかに人間の才能にとって有害であるかは痛切に感じている。

教育とは結局、こうした条件をできるだけ除いて、おのおのの素質が思い切りのびるにふさわしい状態をつくってやるという消極的な意味しか持たないように思っている。この見地から、この戦争、つまり第二次大戦が、いかに多くの才能の、のびるべき運命を減ぼし去ったかを考えるのである。

私もまた、自分の能力なりに、まさに正常な発展をしようとしていたところを戦争のために中断されてしまい、その後経過した5年間の年月は、もはや取り返しのつかない損失を私の上にもたらしたことを、今度このパリの研究所に来て再び、しみじみと思いついたのである。

私はもちろん、できるだけ、この損失を取り返したいと思って努力してみるものの、その努力は果たして効果があるものか、はなはだ疑わしい。ちょうど水の勢いに流されている水草のように、一度ある岸辺を去ってしまったものは、もはや再び元の岸辺に戻れないのではないだろうかという大変悲観的な気持ちになっている<sup>3)</sup>。

1902: ラジウムの原子量をつぎとめ(74f)  
 $Ra = 225.93$

1898: 6月にキュリー夫妻がポロニウムの単結晶に成功。  
 12月にはラジウムの単結晶に成功。

1906: 11月、マリー・ド・エールのあ  
 とそついで、ソルボンヌの  
 教授職となり、フランス史上初  
 の女性教授。

放射能の  
 フォト

1906: 4月19日ド・エール馬  
 車にひかれて死亡。

1903: マリー博士号取得。  
 キュリー夫妻、アンリ・バ  
 レットと共に「放射能の発見」  
 でノーベル賞受賞(物理学)

ALFRED NOBEL  
 PIERRE CURIE  
 MARIE CURIE

1912: ラジウム研究所所長就任。  
 1914: ラジウム研究所落成。この年、第1次  
 世界大戦開始(～1918)。

1911: ランジュバン事件で途中の人に。  
 「ラジウムの発見」により、ノーベル化学賞を  
 単独受賞。

キュリー夫人  
 不倫か!?

キュリー夫人  
 2度目の  
 ノーベル賞

1924: イレヌとフレデリック、  
 人工放射能の発見(35歳に  
 ノーベル化学賞)。  
 マリー、放射能のために  
 白血病で死去(66才)。

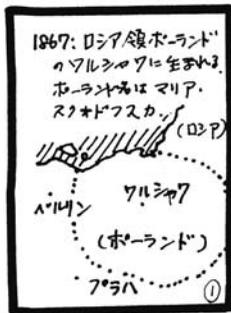
1929: マリー、アメリカに訪れ、  
 フーバー大統領に会う。  
 18のラジウムとワルシャワ  
 の研究所の為に60万。

1926: 長女イレヌ、同僚科  
 学者のフレデリック・ジョリオと  
 結婚。

ジョリオキュリー  
 夫妻と名づく

# マリア・キュリーと放射能

©作画 K・KAWASHIMA



つまり途中でキャリアに中断がある、これはどうしようもないですね。湯浅年子の努力とは関係ない。

こういう視点でマリー・キュリーのキャリアを見てみると、確かに大学入学前は、被占領国に生まれたということもあって、もたもたしていますが、パリに出てきてからは湯浅年子が被ったような中断は1回もありません。第一次大戦を経験していますが、これは名を成してからであって、いまから大発見、というときに第一次大戦が起きたわけではありません。こうした幸運も重なって、世界的な科学者マリー・キュリーが生まれたのではないかと思ったのです。

## 2 科学者マリー・キュリーの誕生と放射能の発見

今度は家族や友だち、あるいは「折れない気持ち」という視点から、マリーの生涯を細かく見ていきたいと思います。この人の家族構成はどうなっていたのでしょうか。両親と長姉のゾーシャがいて、兄のユゼフ、次の姉たちのブローニャ、ヘラと続き、マリーは5人きょうだいの末っ子です。

両親とも先生、しかも不遇の教育者夫妻です。というのも、2人ともポーランド人としての誇りを強く持っていた人で、特にお母さんは信心深いカトリックでした。キリスト教にはプロテスタントとカトリックとギリシャ・ロシア正教、大きく分けて3つあるんですが、ポーランドはカトリックです。

ロシアに占領されているときに、ポーランド人の誇りははっきり出していると、当然支配者の受けは悪くなります。つまり、知性も教養もあって家柄も悪くないけれど、ロシアにしっぽを振らないので、この夫妻は不遇でした。

しかもこの母親はマリーが4歳のときに結核になります。なので、マリーは母親にあまりかまってもらえません。ゾーシャは長女だから一番熱心に看病していたのですが、それで疲れていたときにチフスに感染して死んでしまいます。マリーは8歳でした。孝行娘がこんな形で死んだので、お母さんは絶望します。それから一気に体調を崩して、結局2年後に後を追

ます。だからマリーは子ども時代に非常に強いショックをうける。特にお母さんが熱心なカトリック教徒であったこともあり、聖母マリア的なイメージでお母さんを見ていたのですが、そんな敬虔な人がこんな悲惨な死に方をするのか。じゃあ、神様は、いったい何をしてくれるのかということで、これ以降宗教に対して非常に懐疑的な気持ちになります。

当時、ポーランド人の団結の柱は二つ、カトリックとポーランド語でした。というのも、占領国がこれを取り上げようとしたからです。日本も昔、朝鮮半島や台湾を占領したときに、同じようなことをしています。一般的にAという国がBという国を占領すると、宗教を取り、言葉を取って、自分の文化に同化させようとしています。

逆に、それを守れた民はもう一度復活できます。例えば、ギリシャがそうです。ギリシャ正教とギリシャ語を守ったので、ずっとトルコに支配されていたけれども独立できました。この両方ともが消えたら、その民族は滅びます。

カトリックの信仰とポーランド語という二つの柱のうちの一つをマリーは捨ててしまう。そんな大きなものを捨ててしまったけれど、その分の情熱を科学に向けます。科学にのめりこんだのは、一つには、父親が物理学の先生だったことが理由です。マリーの父は本当は研究者になりたかった人でしたが、国の事情や経済的な問題もあって、それを断念して先生になったのです。しかし研究者になりたかったという気持ちは持ち続けていた。結核のお母さんは生前でもマリーをあまりかまえなかったので、当然彼女はファザコンになります。お父さんの跡継ぎになりたい、みたいな気持ちが湧くのは当然です。

もう一つは、この屈辱的な状況でポーランドはどうすればいいのか、という問題です。独立のためにももちろん武力闘争もやりますが、それだけではだめなんだとポーランド人は思い始めます。ポーランドの知識人たちは人材育成ということに注目するのです。革命で一次的に政権をひっくり返しても、後が続かなかったら話になりません。後を続けるためには、国民の知的レベルの向上が必要です。そのために当時のポーランドでは教育、特に科学教育に力を入れていました。

こうしてマリー・キュリーは10歳ぐらいで信仰は捨てますが、その分、科学の信仰に向かいます。これは、もちろん科学の才能があったからですが、それだけではなく、国を背負って科学をやるという意識もあったからです。

ですから当然ですが、マリーの家族はみんな、彼女のことを応援します。しかも兄と上の姉はお医者さん、下の姉は高校の校長先生になります。つまり、男も女もみんなキャリアを持っています。それはこの家族が勉強好きだっただけではなく、ポーランド人として、学問を身につけてロシアに勝とうという気持ちがあったからです。ですから、足を引っ張り合うことなく、互いに応援し合います。もちろん周囲のポーランド人もこうした向学心のある同胞を応援します。さっきの村木さんの話ではありませんが、マリーの場合、精神面での家族の協力は完璧です。亡き母や姉にしても、もし生きていたら自分に味方してくれるだろうという絶対の確信が、マリーの中にあります。だからこの人は、生きていた家族にも、死んだ家族にも、自分の進路を邪魔されたことは一度もありません。それどころか、その生涯の最後までみんなが励ましてくれているのです。

こう考えると、たしかに被占領国に生まれたり、貧乏だったりするのは、楽しいことではありませんが、マリーにはそれを補って余りあるものが存在しました。ではここで、これと反対のケースについて見てみましょう。

この人より少し前の世代の女性で、やはり世界の偉人になっている女性があります。それは先進国の由緒ある家柄のお嬢様でした。子ども向きの伝記に絶対載っている女の人がありますが、誰だか分かりますか。

そう、フローレンス・ナイチンゲールです。この人は、イギリスの大金持ちの家に生まれたお嬢様です。両親が長期の外国旅行中にフィレンツェで生まれたので、その英語名を取ってフローレンスと名付けられました。つまり両親が何か月も仕事もせずに旅行してられる身分なのです。しかしこの「身分」が彼女の進路をさまたげます。

看護婦になりたいというナイチンゲールの希望は家族に大反対されました。母親は何度も卒倒し、お姉さんは半狂乱になります。親戚中がよってたかって反対します。だから、ナイチンゲールが看護婦になりたいと思っ

てから、本当に看護婦になるのに10何年ぐらいかかっています。その間、ずっと「家の中で」いじめられ続けました。

ナイチンゲールは、お金には全然困らないし、社交界の縁故も強力です。政権の中枢にも、たくさんの友人や知人がいました。ですからいったん看護婦になったあとは、その立場を最大限に利用して、患者や病院のために尽くしました。普通の家に生まれた女性には絶対にできないことです。

けれども、そこに至るまでに、家族にずっと非難され続けたのです。お前の希望する進路は家の恥だ、きょうだいや親戚のことを考えろ、みんなに迷惑が掛かる、というようなことを言われ続けたのです。だからナイチンゲールは一時期、ほとんどうつ病寸前にまで陥るのですが、マリー・キュリーには、そんな経験は一度もありません。

ですから、一見すると、先進国のお金持ちのお嬢様だったナイチンゲールの方がずっと恵まれているように見えますが、内実はそうとも言えません。当時は法律も完全に家父長制ですので、最終的に父親が認めたからこそ、看護婦になることができましたが、母親や姉は死ぬまでずっと、そのことに文句を言い続けていました。お金があっても死ぬまで愚痴られるよりは、お金がなくても、みんなが自分に協力してくれる方がはるかにいいのではないのでしょうか。だから私は、マリー・キュリーよりナイチンゲールの方が苦労人なのではないかと思っています。

次の幸運は、フランスの家族です。マリー・キュリーは最初から科学者になりたいと思っていたわけではありません。この人は、もともとはポーランドで教育者になるためにフランスに留学したのです。これは、当時のポーランド人留学生によくある希望でした。

例えば、お姉さんもソルボンヌ大学の医学部に入り、最初はパリで開業しますが、最終的にはポーランドの、当時オーストリア領だったザコパネというところに結核療養所をつくって、ポーランド人の結核患者の治療に努めました。お兄さんもワルシャワ大学に行った後、ポーランドで医者として活動します。だからみんな国のために尽くしました。なのでマリーも、ソルボンヌ大学に行ったあとはポーランドに帰って物理の先生になって、また自分と同じように賢いポーランド人をつくるつもりでした。ところが

フランスでピエール・キュリーに出会い、プロポーズされて結婚することになるのです。

こういうかたちで結婚したカップルというのは、実はほかにもいて、有名なのがアインシュタインです。アインシュタインは2回結婚しているのですが、はじめの奥さんは、ちょうどマリー・キュリーみたいな生まれの人で、セルビア人でした。やはり国がない民族です。つまりアインシュタインは、オーストリア・ハンガリー帝国に支配されたセルビアの女子学生と結婚したのです。

ところがこの結婚は破たんします。奥さんにとって、アインシュタインの両親は最悪でした。特にお姑さんが、息子の嫁として普通の専業主婦を望んでいたのに、科学を学ぶ同級生と結婚したというのでずっと反対し続けました。結局、アインシュタインは彼女と離婚して、同じユダヤ人の専業主婦と再婚することになりました<sup>4)</sup>。

マリーの場合は、この種のトラブルがありません。ピエールは兄と2人兄弟ですが、2人とも科学者です。しかも医者だった父親はマリーの父同様、もともとは科学者、つまり医学者になりたかった人でした。しかし経済的な事情から開業医になります。それでも、ずっと科学者への夢を持ち続け、それを息子2人が継ぐのです。

その上ピエールは非常に変わった子でした。どう変わっていたかと言いますと、例えば算数を始めると、45分でやめて、はい、10分休んで次は体育ねというようなことができない子でした。興味が沸いたらずっと算数の問題を解いている。何かに熱中している時に、時間で区切って、はい、次ということができません。だから、集中力も学力もあるけれど、学校の仕組みに合わせることができないのです。父親は教育に一家言ある人なので、もっと普通の子どもだった長男にも高校までは学校に行かせずに、家庭教育を施したのですが、特に二男の教育は特殊なものにします。要するに得意科目を中心にやらせるんですね。ただしこの時期は、まだフランスで義務教育が始まっていませんので、家庭教育そのものは、そう珍しいことではありません。ともかくこうしてピエールは16歳で初めて学校、つまりソルボンヌ大学に入学します。つまりピエールは、かなりの変人でした。マ

リーに会ったときは35歳ぐらいですが、独身で親と暮らしていました。お兄さんは、とうの昔に結婚して家を出ていました。

このままでは、二男は一生結婚しないんじゃないかなと親が思っていたところに、マリーを連れてきたので、親としては万々歳でした。反対どころの騒ぎではない。ああ、よかったなというところですね。

しかも、ピエールの父親は科学者になりたかっただけでなく、政治的にもマリーの境遇にシンパシーを持っていました。つまり一種の革命家だったのです。フランスという国は、フランス大革命以来、自由・平等・友愛的な共和制の政府と、あとはナポレオンみみたいな独裁的政府というものの間をさまよっていた。それで19世紀には色々和革命が起きます。ピエールの父親は根っからの共和派でした。それでこの嫁を気に入るわけです。ポーランドの独立のために頑張ろうというのは、自分と相通じるところがあったからです。ピエールの母親は、二人が結婚してまもなく死んでしまうので何を考えていたのかわかっていないのですが、とにかくお舅さんの方は、息子の嫁であるマリーを支え続けました。きっと彼女の中に、政治的にも科学的にも、ある種の自分の理想を見ていたのだと思います。

家族の支えというのは、自分の出生家族だけでなく、伴侶も支えてくれないと大変なのですが、伴侶だけが支えても、伴侶の両親にすごく疎まれるとアインシュタインの最初の結婚みたいになる可能性があります。しかしマリーは伴侶の親にも支えられた。だから、この人は二つの家族、どちらについても非常に恵まれています。

ピエールのお兄さんのマリー・キュリーへの信頼にもすごいものがあります。後に、マリーが未亡人になってから不倫疑惑事件で批判されるのですが、そのときも、彼女をかばって公的声明を発表してくれます。自分の弟がマリーと結婚している間、どれだけ幸せだったかを述べ、何があろうと自分は彼女を支持するという声明を出す。つまり、たとえ不倫が事実でも自分は義妹の味方だ、という含みのある文章を発表します。当時の倫理基準を考えると、これはすごいことです。そのぐらい周囲が支えてくれるのです。だからこそあれだけの科学的業績を上げることができたのです。

研究の物理的環境には恵まれていません。これはまぎれもない事実です。

夫妻は当時の学会で力を持っていないので、ボロ小屋で研究していて、ラジウムを抽出するのに4年もかかりました。最先端の研究所なら2年で完成していた仕事です。

しかし、女性の社会進出という問題を考える場合、予算が潤沢でも、身近な人間関係でトラブルがあったら、そちらの方がきついただろうと思います。両方恵まれるに越したことはないけれども、仮に一つだけを選べというなら、私は人間関係のトラブルがない方が、ジェンダー的には、はるかにましなのではないかと思います。なぜなら女性というのは、やっぱり、妻とか母とか、そういう家庭内の立場を男性より重んじられるので、そこでトラブルがあると、それが仕事に響いてくる可能性が男性より高い。たとえばピエールが夫や父として何をしたかということが、マリーほどには問題にされないのを見てもそのことは明らかです。マリーは出生家族も結婚した家族も自分を応援してくれるという、お金で買えない宝というのを、ずっと維持できた稀有な人だと思います。彼女はこうした環境の下、ふたつのノーベル賞を受賞したのです。

研究の経緯は次のようなものです。フランスのエリート科学者アンリ・ベクレルが最初にウラニウム元素の放射能を発見します。その論文を読んだマリー・キュリーが、ほかにもそういう元素がないかいろいろ調べて、そこにピエールが合流して、ラジウムとポロニウムという新元素を発見しました。これら全体に対してこの3人に、「放射能の発見」でノーベル物理学賞が授与されました。

細かい話になりますが、ここでアンリ・ベクレルとマリー・キュリーの違いについても少しお話します。ベクレルは確かにウランの放射能を発見しましたが、それが物理現象なのか、化学現象なのか、はっきり言いませんでした。しかしマリーは、それは物理現象だと断言しました。これは科学者としての彼女の最大の功績です。だからこそラジウムとポロニウムが発見できたのです。元素表で見ますと、ベクレルが発見したウランUの原子番号は92です。ラジウムRaは88で、ポロニウムPoが84です。ちなみに、87のFr、フランシウムというのは、マリー・キュリーの弟子が発見しています。

## 元素表

	1族	2族	3族	4族	5族	6族	7族	8族	9族	10族	11族	12族	13族	14族	15族	16族	17族	18族
1周期	1 H																	2 He
2周期	3 Li	4 Be	<div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; gap: 10px;"> <div style="width: 15px; height: 15px; background-color: #cccccc; border: 1px solid black;"></div> 自然放射性元素  <div style="width: 15px; height: 15px; background-color: #e0e0e0; border: 1px solid black;"></div> 人工放射性元素         </div>										5 B	6 C	7 N	8 O	9 F	10 Ne
3周期	11 Na	12 Mg											13 Al	14 Si	15 P	16 S	17 Cl	18 Ar
4周期	19 K	20 Ca	21 Sc	22 Ti	23 V	24 Cr	25 Mn	26 Fe	27 Co	28 Ni	29 Cu	30 Zn	31 Ga	32 Ge	33 As	34 Se	35 Br	36 Kr
5周期	37 Rb	38 Sr	39 Y	40 Zr	41 Nb	42 Mo	43 Tc	44 Ru	45 Rh	46 Pd	47 Ag	48 Cd	49 In	50 Sn	51 Sb	52 Te	53 I	54 Xe
6周期	55 Cs	56 Ba	ランタノイド	72 Hf	73 Ta	74 W	75 Re	76 Os	77 Ir	78 Pt	79 Au	80 Hg	81 Tl	82 Pb	83 Bi	84 Po	85 At	86 Rn
7周期	87 Fr	88 Ra	アクチノイド	104 Rf	105 Db	106 Sg	107 Bh	108 Hs	109 Mt	110 Ds	111 Uuu	112 Uub	113 Uut	114 Uuq	115 Uup	116 Uuh	117 Uus	118 Uuo

ランタノイド	57 La	58 Ce	59 Pr	60 Nd	61 Pm	62 Sm	63 Eu	64 Gd	65 Tb	66 Dy	67 Ho	68 Er	69 Tm	70 Yb	71 Lu
アクチノイド	89 Ac	90 Th	91 Pa	92 U	93 Np	94 Pu	95 Am	96 Cm	97 Bk	98 Cf	99 Es	100 Fm	101 Md	102 No	103 Lr

そののち、ピエールもベクレルも亡くなり、マリーが単独で、今度は金属ラジウムの単離に成功します。放射性元素というのは基本的に金属です。だからウラニウムもラジウムもポロニウムも金属ですが、金属の形では自然界に存在しません。それを人工的に取り出したという、これ以降誰もそれに成功していないという超絶技巧的作業を行ったこともあり、物理学賞とは違う名目、「ラジウムとポロニウムの発見」でノーベル化学賞が授与されました。

じつにこのあと、人工放射能の発見によって1935年に長女夫妻がノーベル化学賞を受賞しています。長女イレヌは科学者と結婚して、やはり夫妻でノーベル賞を取ったのです。次女エーヴはジャーナリストになり、いまでも読み継がれているお母さんの伝記『キュリー夫人』を書きました。そして彼女もノーベル賞と無縁ではありません。夫がユニセフの総裁だったとき、この機関に与えられたノーベル平和賞の授賞式に出席しています。もちろん、そのときのエーヴはただの奥さんではなく、夫と共に人道的活動をしていました。

マリーは妻として夫と一緒に取り、一人でも取り、母としても、ノーベル賞を取るような娘を育てました。こうして見ると、妻としても母としても非常に順調に見えます。ここもマリー・キュリーが他の女性科学者より有名な理由です。

もう一つは、これは福島の問題とも関係するのですが、放射能というものの性質も、マリーを有名にした理由です。科学の大発見には色々ありますが、大抵はその理解には高度な知識を必要としますし、普段の生活に直接関係があるようには見えません。ところが放射能というのは、目には見えませんが、生活と密接に関わっています。たとえば、地震のせいで原発事故が起これば、私たちに被害が出る。放射能は、そういう具体的な発見でもあります。

さて、この放射能は当時どう考えられていたのでしょうか。放射性物質が放射線を放出する時に熱と光を発することから、これは非常に有用だと考えられました。まずは医療への応用です。ピエールだけではなくドイツの医者も発見したのですが、ラジウムからの放射線の皮膚への影響が注目されました。ラジウムを健康な肌にさらすと、ただれができます。それだけだったら怖いだけですが、これが悪い皮膚をきれいにできるのではないかと考えられ、当時、皮膚疾患の治療にラジウムから発生するガスを当てるのが試みられ、キュリー療法と呼ばれました。

ピエール・キュリーは、ノーベル賞の講演でこんなことを言っています。

ラジウムの放射線や、そのエマネーションは現在盛んに研究中である興味ある効果を引き起こします。ラジウムの放射線は、ある種の病気（皮膚結核、癌、神経痛）の治療に使用します。ある場合には、その作用は危険になります。数100分の1グラムのラジウム塩を封入した小さいガラスのアンブルを、木製、あるいはボール製の紙に入れて2、3時間ポケットに入れておくと、べつに何も感じませんが、15日間そのままにすると表皮に赤斑が生じ、そこがただれて非常に治りにくくなります。さらに長時間そのままにすると、麻痺したり死に至ったりします。ラジウムは、厚い鉛の箱に入れて運ばなければなりません<sup>5)</sup>。

これが放射線治療のはじまりでした。

つまり、一般人にとってキュリー夫人は何を発見したのか。それは新元素の発見者というより、新しい薬の発見者というイメージになってしまいました。特にアメリカで「癌を克服したキュリー夫人」という宣伝が行われたことから、夫妻の仕事は医療上の発見にされてしまい、そのことが大きな名声につながったのです。

もう一つの応用分野は、ラジウムが暗闇で光ることを利用した塗料の領域です。時計の文字盤の蛍光塗料に混ぜると非常によく光るので、時計工場でさかんに使われました。当時、一番お金持ちだった国は、第一次大戦後は特にアメリカですので、アメリカの時計工場で、どんどんラジウムを生産開発しました。

ここで企業にとってありがたかったのは特許料がなかったことです。ピエールは理想化肌の変人で、お金にも名誉にも疎い人です。彼は純粋科学で金儲けをしてはならないとして、夫妻はラジウム製造方法の特許を取りませんでした。

ただ、この崇高な行為は裏目に出ます。特許料がないので、企業は自由にラジウムを生産でき、時計工場では筆をとがらせるために、工員は筆をなめていました。だから工員たちはラジウムを食べてしまった、つまり内部被ばくをしたのです。たくさんの女工さんが顎の癌で亡くなりました。ついに裁判が起きて女工さんの側が勝つのですが、「癌の特効薬」という印象が強かったので、放射能の危険性は、一般にはほとんど取り上げられませんでした。

しかも「医療」の話はさらにエスカレートします。皮膚癌が治るなら、普通の肌をもっときれいになるのでは、あるいは内臓も健康になるのでは、と考えた人たちが現れます。こうして「ラジウム」入りの化粧品や健康食品が登場します。あと、先ほどの「光る」ことからの連想で、ラジウム入り金だわしとかも発売されます。

幸運なことに、ほとんどはインチキ商品だったそうです。しかし本当にラジウムを入れていたミネラル・ウォーターがあり、それを飲みすぎて死んだ人まで出ました。1920年代から50年代まで、ラジウム入りの製品がた

くさん発売されます。つまり原爆の後までも、そんな商品が巷にあったのです。驚くべき話です。そして当然ですが、「キュリー夫人」の名声も大きなものであり続けました。

### 3 マリー・キュリーとジェンダー問題

ここでもう一度、歴史的な事情に戻ってみましょう。1867年から1934年というマリー・キュリーの生涯はどういう時代だったのか、ということです。

基本的に、この人のメンタリティーは19世紀のもので、20世紀まで生きていますが、人格が形成されたのは19世紀の後半です。19世紀というのは、どういう時代だったのか。それを知るためにその前の世紀、フランス革命をはさんだ18世紀との比較で、特にファッションという側面から考えてみましょう。

大雑把に言うと18世紀は貴族が、19世紀はブルジョアが権力を持っていた時代でした。そのときの男女の在り方はファッションにどう影響していたのでしょうか。その差は特に男性服に顕著です。18世紀の支配階級の男性服は色も派手だし、刺繍やレースで華やかに飾られています。スカートとズボンの差はありますが、男女で服装の印象に変わりはありません。ところが19世紀は違います。19世紀の男性服の基本はダークスーツと白いシャツで、ものすごく地味です。

これは貴族とブルジョアの意識の違いなのですが、ブルジョアというのは資本家で、働く人です。だから、男は働く。つまり、19世紀の服装は、男は外、女は内という考えがファッションに出ているのです。もちろん支配階級の男性が肉体労働をしているわけではありません。それでも18世紀のような、パステルカラーに刺繍が一杯の絹の服を男が着たりしません。そして上流階級の理想は下の階級にも影響しますので、こうした男女の在り方が、19世紀の理想になります。裏を返せば、上流階級の男も女もけばけばしい服装をしている18世紀というのは、どちらの性であっても、働かなくて、社交界でひらひらしていることが、社会の理想だったのです。と

ころが19世紀の理想は、男は外で働く、女は内で家庭を守るか、あるいは着飾って男の動産として、男の稼ぎを社会に示すことになったのです。

こうして、19世紀には男は服装で自分の稼ぎを露骨に見せてはならなくなります。ダークスーツでは、遠目からは貧富の差が分かりません。けれどドレスは分かります。何が決め手かというと、まず「色」です。ドライクリーニングは存在しませんから、明るい色の服をきれいな状態で着ることができるのは金持ちだけです。貧乏人は洗濯しなくてもいいような色の服しか着られません。あるいは、古着で流れてきた、汚くなったものか、です。だから女は、遠目でも貧富の差を周囲に見せつけられるのです。つまり19世紀には、現実はともかく、理想として、男と女の役割は非常に違うということが強調されました。これが19世紀の側面その一です。

しかし19世紀にはもう一つの面があります。フランス革命に象徴される、自由・平等・友愛という理想の実現という側面です。「平等」の中に当然、男女の平等という理念も入っていました。平等とはいかにあるべきかということが、19世紀にさまざまに議論されます。

男女の差異、つまりは「子どもを産む性かどうか」を強調する平等と、男女の違いを縮小する形の平等の間で、人々は揺れていました。しかしいずれにせよ、19世紀には、何らかの平等を考えるという傾向が存在し続けました。

そこで、19世紀ファッションにはもう一つの流れがあります。たとえば世紀の終わりに出てきたスポーツファッションでは、女性服が非常にシンプルになって、飾りという面では逆ですが、男女の差という面では18世紀的な概念のものが出現します。ここでは男女が目指しているものは大きく違いません。女も男同様馬乗りになって自転車に乗りましょうということで、マリー・キュリーが新婚旅行で履いたような、ブルーマースタイルが出てきます。

したがって、19世紀というのは、「男女は違う生き物です」という流れと、「男女で同じことができます」、という二つの流れが行き来した時代です。そのせめぎ合いの中で、女子の大学入学も認められてくるのです。

後者の傾向が一番はっきり出た運動が、主に女性参政権獲得をめざした

第一波フェミニズム運動です。フランス革命が起きて男性の普通参政権は認められます。つまり、19世紀の男性服が示すように、粗末な背広を着ていようが、上等な背広を着ていようが、背広の男はみな同じように、金持ち男も貧乏男も参政権を持っているのです。

ところが女性は、19世紀になっても相変わらず、18世紀のようにばっと見て貧富の差が分かり、そしてどちらの女性にも参政権はありません。でも、この問題がずっとくすぶっていて、ついに女性参政権を認めよという大きな運動が起きるのです。また、ヨーロッパの中でも、男女の違いを強調する国と、そうでない国とがありました。そしてマリー・キュリーという人は、男女の平等を比較的強調する文化の中で成長した人なのです。それは彼女がこの時期のポーランド人だったことと関係しています。

じつはポーランドは、16世紀のコペルニクスの時代には、ヨーロッパではロシアに次ぐ面積の大きな国でした。土地も肥沃で、経済力もありました。ところがフランス革命のころ、すごく小さくなってしまいます。ロシアとプロイセン（後のドイツ帝国）、それと神聖ローマ帝国（後のオーストリア・ハンガリー帝国）に分割支配され、どんどん小さくなっていきます。マリー・キュリーが生まれた時にはポーランドは完全に消滅していました。

ところがこの悲劇がポーランド人の心性をかなり男女平等の方に傾けます。繰り返しになりますが、この占領状態を脱するには人材育成が必要であり、そのためには性にこだわってられない事情があったのです。つまりマリア・スクオドフスカ——ポーランド名ではマリーはこう呼ばれていたのですが——は、女だから勉強しなくていいなどとは言ってられない環境の中にいました。みんなで協力して祖国の独立を実現しましょう、優秀な女の人が家に引っ込んでいたら、人材として足りません、という考え方があったのです。

ですからマリーの家族では、先の三国の政策のせいでポーランドでは女子が大学に行けないため、姉さんの一人と自分が留学したのですが、これは何もマリーの生家が変わった家なのではなく、そういう人が、実はポーランドには多かったのです。

もちろん先進国フランスに行くということは、当時のポーランド人にとっては、物価も高いし言葉も違うので大変です。しかしマリーがソルボンヌ大学に行ってみたら、何とフランス人の女子学生がほとんどいませんでした。男子は違いますが、女子では絶対数として留学生の方が多かったのです。ポーランド人だけでも、フランス人女子学生より多かったのです。これは信じられない話です。いまの日本でも、例えば大阪府立大学で、日本人女子より外国人女子の方が多かったらびっくりしませんか。

ところが、じつは日本の大学にはそういうセクションがあります。私は名古屋工業大学の教員ですが、たぶん他の多くの理工系の大学、あるいは学部では同じだと思います。こういう大学の、あるセクションでは、留学生の割合が多いところがあります。特に女子にその傾向が顕著です。たまに女子学生がいるなどと思うと、たいていは外国人です。どこのセクションかわかりますか。

博士課程です。名古屋工業大学では、学部は男女共に日本人の方が圧倒的多数ですが、博士課程になってくると、日本人は激減します。女子は留学生の方が多いです。中国人留学生だけをとってみても、博士課程の中国人女子の方が日本人女子より多いです。なぜでしょう。なぜ工学部の博士課程の女子は留学生ばかりなのでしょう。逆に、日本人の女の子はなぜ工学部の博士課程に行かないのでしょうか。

これは出口、つまり就職の問題です。日本では博士課程を出た学生には就職があまりありません。特に女子学生にその傾向が強いのです。だから進学しないのです。男子も修士の方が就職しやすいので、優秀な日本人男子でも、博士に行かずにみんなどんどん大企業に就職してしまいます。

つまり、人はなぜ大学に行くのか、そしてなぜある学部は人気があって、別の学部はそうでもないのか、ということを考えてみると、大抵の場合、出口、つまり就職事情と大きな関係があります。だから日本の企業が、工学部の博士課程を出た日本人の女子をたくさん採用するならば、女子はそこに行くでしょう。けれども現実には、博士課程の学生、特に女子を敬遠するので、学力とは無関係に女子はほとんどその道を選びません。

さて、ここで19世紀末のフランスに戻ります。先のメカニズムで行くと

どうなるのでしょうか。確かにロシアやポーランドと違って、フランスでは女子が大学に入学できました。できましたけれど、それは総論賛成、各論反対という状態の下で成立した制度だったのです。門戸は開いているが、行っても出口がない。就職であれ、結婚であれ、大学に行くことが女子に有利に働かないという雰囲気が社会の中にありました。だから、優秀な女の子でも大学には行きたがらない、あるいは親が行かせたがりませんでした。そのために、法律が認めた後も、フランスには大学入学に必要な単位を供給する女子高等中学がほとんどできませんでした。

フランスが開いてくれた女子大学生への門戸を有効活用したのが、たとえばポーランド人の女の子でした。だから、物価が高かろうが言葉が違おうが、彼女たちはフランスの大学に行ったのです。しかもこうした国の方に、男子並みの科目の単位を出す女子高等中学校がたくさんあったのです。

ですからこの時代、女性が科学者になるのに、ポーランドに生まれるのと、フランスに生まれるのと、どちらが有利だったかという点、実はポーランドだったかもしれません。この点では、ポーランドに生まれることは、「逆境」ではなかった。だから、女子の大学進出という点で考えると、フランスに生まれたり、あるいはナイチンゲールの例で見ると、イギリスに生まれたりする方が、よほど逆境だったかもしれません。

ほかに逆境の話でよく挙げられる例は、フランスで一番権威のある科学者集団である科学アカデミーが、1911年の会員選挙でノーベル賞受賞者であるマリー・キュリーを落選させた、という事件です。ちなみに、1903年の物理学賞同時受賞者のベクレルも夫のピエールも会員でした。

つまり、夫妻でノーベル賞を取って、夫が会員だったとすれば、実力としては奥さんが入る資格は十分あります。けれども、17世紀にできたこの組織は、女性を会員にしたことは一度もありませんでした。それでマリー・キュリーが立候補した途端に、マスコミにさかんにとりあげられました。しかも俗っぽいやり方で、です。たとえば白いレースの服を着たマリーと、真面目な風情で描かれたもう一人の候補、といったイラストが新聞に載りました。こうしたイメージは、まさに19世紀の男女の差異を強調する方のファッションイメージと完全に重なっています。つまりここに

は、レースに象徴されるような性の人間が、科学アカデミーに入っているのか、というメッセージが込められています。

ファッションとの直接の関連では、アカデミー会員の制服問題がありました。これはナポレオン時代に決められた服で、軍服なのです。この服を着る時は、会員は剣を携えることが定められています。ナポレオンは男女の性別分業を徹底した人なので、女性がアカデミー会員になることを想定していませんから、ものすごく「男らしい」服をデザインさせたのです。女性が会員になると、この軍服を着てズボンをはくのか、あるいは特別なスカートを作るのか、とかそういう些末なことがさかんに議論されました。

結局どうなったかというと、ノーベル賞を取ったマリー・キュリーが、どうみても業績の劣るフランス人男性科学者に負けます。2票差でした。こういう「非科学的な」攻撃をされる。これは女性差別の典型と言われる事件です。もちろんそうなのですが、実は2票差というのは、あと少しで当選していた、とも言える票差です。

なぜこう言うかということ、娘のイレヌの立候補との比較で、興味深いことがわかるからです。第二次大戦後、フランス女性は参政権をついに獲得しました。その時イレヌもノーベル賞受賞者で、共同受賞の夫はすでにアカデミー会員でした。それなのに彼女は、1950年代に4回も会員選挙に落ちるのです。しかも圧倒的票差で、です。1910年代に、お母さんが2票差で落ちたのは大違いです。なぜ娘はこの時期、そんな圧倒的票差で落ちたのでしょうか。

それは、さっきの『アンアのセックスできれいになれた?』のあとがきを最後まで読んでいただくとよくわかります。確かに市民としての権利で考えれば、1950年代よりも1910年代の方が女性には不利です。でも、いまからみんなが女性参政権を取りましょうという機運が盛り上がっていた時期でした。男女同権を主張する人たちは、1910年代のマリーの立候補を応援しました。別にその人たちがマリーを知っているわけではないのですが、反対派同様、マリーの知らない人たちが二派に分かれて、応援したり批判したりしたのです。つまり、ある意味で攻撃も支持も盛り上がって、それなりに「進歩的な」時期でもあったのです。マリー・キュリーには楽

しくない思い出でしたが、実は、これは「ほとんど当選しそうだった」選挙でもあるのです。そう考えると、第一波フェミニズムの勝利の現象として捉えることもできるのではないのでしょうか。

女性の社会進出への世論に関しては、イレーヌの生涯の方に波があります。しかしマリー・キュリーでは、ちょうど生まれたときから死ぬまで、ほとんど右肩上がりです。確かにフランスが女性参政権を獲得したのは、マリーが死んでからです。この人はポーランドにおいてもフランスにおいても、生涯参政権を持てませんでした。きつと取れるというある種の希望を持たた人なのです。

祖国については、第一次大戦後にポーランドの独立が実現します。ですからこちらの問題に関しては、「独立したい」から「独立しました」までを見ました。女性の権利については、「権利がほしい」から「そのうち取れるだろう」というところで死んでいます。そういう意味では、物理的な権利はありませんでしたが、希望の中で生涯を閉じた人、あるいは希望の中に生涯があった人なのではないかと思います。

もちろん、希望があっても実際の市民的権利がないのは不便です。たとえばマリーのように未亡人になったら大変です。女性参政権が成立するまで、フランスの女性は銀行口座を開く権利もありませんでした。マリーは1906年に夫を亡くします。自分の家族はポーランドです。彼女を応援し続けた舅のウージェーヌも、その数年後に亡くなります。この時点で、近くに住んでいる身内の男がいなくなります。それでどうしたかという、ピエールの弟子がマリーの保証人になって、銀行預金の管理とかも全部していたんですね。ノーベル賞をふたつ取った人でも、女性であるだけで銀行口座が持てなかったのです。

話は変わりますが、このころ大実業家だったシャネルも同じ立場です。ですから、力ある男性とのシャネルの奔放な恋愛、というものは、この視点からも考える必要があるでしょう。どんな有能な科学者でも実業家でも、女性は誰か男を立てないと何の契約も交わせないし、貯金もできないという状況がありまして、大変でした。そういう意味ではフランスは日本よりひどい状況でした。これが第二次世界大戦終了まで続くのです。

もう一つの女性差別の話としてよく言われるのが、ランジュヴァン事件という不倫疑惑事件です。ピエール・キュリーが死んでから5年後のことです。アカデミーの選挙に落ちるのが1911年1月ですが、この年の11月にマリーは2度目のノーベル賞、第11回ノーベル化学賞をもらいました。じつはこの発表の直前に、ピエールの弟子で5歳年下のランジュヴァンと不倫をしているという記事が大衆紙に載りました。これで子どもたちともども、マスコミに追いかけて回されます。

これがどう女性差別かという点、当時の法律では女性と男性の不貞の扱いがまったく違っていました。自分が結婚している場合に不倫をしたとします。男は、相手が人妻だと別ですが、人妻でなければ、その女性を自分の家に連れ込んで一緒に暮らす、つまり妻と同居させると言い出すまで罪に問われません。これも単なる罰金刑です。女性の場合は、自分が結婚している、あるいは、相手が結婚しているとなると、不倫の事実だけで禁錮刑が言い渡されます。同じことをしても、男と女で刑罰が全然違います。もし男が、自分が独身か既婚かは別にして、有夫の、つまりピエールが生きている時のマリー・キュリーと不倫したら、ピエールはこの男を訴えることができますが、話が逆になると、マリーにはほとんど権利がありません。男にしか、きちんと訴えたり、相手を罰してくれと言う権利がありません。つまり女性はモノなんですね。だから、男のモノである人妻を取ってはいけませんが、既婚男性が独身女性と不倫をしても、夫は自分の妻に対して、(扶養の義務はともかくとして)配慮しなくてもいいというのが当時の法律でした。

そういう状況でランジュヴァン事件のようなことが起きると、どうなるのでしょうか。当時ランジュヴァンは物理化学学校の教授、マリーはソルボンヌ大学の教授でした。この事件で物理化学学校は何も言いません。「男の浮気はよくある話」でおしまいです。しかしソルボンヌ大学は彼女を辞めさせるかどうかで大騒ぎになりました。

このとき、特に女性参政権運動に関係していた女友達の2人がマリーをかばったことが印象的です。フランスの友人はマルグリット・ボレルという作家、イギリスの友人は物理学者のハーサ・エアトン。ボレルの父親は

ソルボンヌ大学の理学部長でした。お父さんは、マリー・キュリーを裁かねばならない立場である。なのに娘がキュリー夫人をかばっていることで父親は激怒しますが、自分は何があってもマリーを守るといって、ボレルは父親と対決します。こういう第一波フェミニストたちの協力体制があったのです。これは、この時期が希望に燃える時代だったからこそとも言えるでしょう。

結局、マリー・キュリーは解雇されませんでした。不倫問題は怎么样了かというのと、こちらは玉虫色の解決となります。いずれにせよ、ランジュヴァンの方は社会的には何の制裁も受けません。この男女の扱いの差は、確かに大きなものです。不倫で女ばかりが非難され、ポスト、つまり生活の糧がなくなりそうなところまで追いつめられます。

ですから、男女差別はひどいのですが、男性ばかりの組織で、マリー・キュリーは生き残るのです。それまでの時代だったら考えられないことです。これはやはり、第一波フェミニズム運動が盛り上がってきて、表立ってかばう男女がきちっと出てきているという時代背景があるのではないかと思います。

女性参政権の話と関係する明るいエピソードもあります。マリー・キュリーのアメリカ訪問です。1回目は1921年ですが、これはちょうどアメリカの女性が参政権を獲得した年でした。マリーは2回アメリカに行っていますが、自分は一銭も使っていません。フランス政府もアメリカ政府も、この旅行費用にはノータッチです。じつはアメリカの婦人団体が寄付金を募って資金を調達したのです。

マリーのアメリカ訪問後に、アメリカの女子大学で理科系の女子学生が増加します。じつは1950年代、イレーヌ・キュリーが何回もアカデミーに立候補しては落ちていた時代よりも、この1920年代の方が、理学部に属しているアメリカ人の女子は多かったんですね。マリーの晩年はそういう時代でした。

アメリカでは女性は選挙権を獲得したばかりで、まだ何をしたいかも分からない女性がほとんどでした。実際に就職先があるとか、現実社会の中にどれだけ具体的な居場所があるのかは未知でした。マリー・キュ

リーみたいに大学の先生になって、まともなサラリーをもらって業績もあって、しかもピエールのような理解ある伴侶に恵まれて、とかそんなことになれる人はほとんどいませんでした。しかし女性たちに希望があった時代だと思います。大統領夫人から庶民の女性たちまでが、キュリー夫人のために寄付をしたのです。こうした女たちの絆があった時代でした。

#### 4 マリー・キュリーのキャリアが語るもの

以上のことから、マリー・キュリーというのは、女性科学者の中では、ひととき高く輝く星で、孤高の星のように見えますが、実は彼女を支えた女性たちの絆もしっかりしているし、家族の絆もある。孤高の人ではありません。最初の話に戻りますと、まさに村木さんが持っていた条件を、マリー・キュリーも全部持っていたのです。

それに時代も味方でした。湯浅年子みたいに、途中で「ああ、あの5年間さえなければ」ということはなかった。もちろん私は「マリー・キュリーに逆境はなかった」とは言いません。占領下のポーランドに生まれることは楽しいことではありません。言葉や信仰を押し付けられるという状況など、ない方がいいに決まっています。しかしまかり間違っても、逆境が人をつくるといった言説に、この人を利用すべきではないと考えています。むしろ、逆境の中にあっても、実は、村木さんを支えたような条件、追い風になった時代、そういうものがあってこそ、人は伸びる、そしてマリー・キュリーこそがその証拠なのではないかと思っています。

最初に述べました湯浅年子の主張、つまり教育によって、どの程度人間の能力がのびし得るものか疑問だという話を思い出してください。教育とは結局、人間の才能や人格が自然に発露し、発展するのを妨げる条件をできるだけ除いて、各自の素質が伸びるにふさわしい状態をつくってやるという視点で考えれば、この人は、湯浅が理想と考えた環境にいたのではないかとさえ思います。

われわれが社会の中で自分の力を生かす、あるいは他人の力を生かすということを考えるときにも、苦勞をことさら称賛するような言説に関して

は用心しなければいけないと、マリー・キュリーの生涯を調べていて痛感しました。

マリー・キュリー自身も同じようなことを言っています。キュリー夫妻は、ピッチブレンドという鉱物の中のラジウムを単離するのに、ひどい研究環境の中で4年もかかったのですが、このときにも苦勞物語ばかりがマスコミで取り上げられました。そしてこの話は、頭さえよければ、粗末な研究室でも偉大な発見は可能なだから、純粹研究にそんなに予算を入れてなくてもいい、という方向に利用されてしまいました。

それでマリー・キュリーは怒ります。あのとき予算と人手がふんだんにあったら2年で済んだ。自分たちが4年かかったのはそれが足りなかったからだと主張しました。しかしなかなかこっちの声は届きません。

成功のために環境が重要であるというのは、当然の真理であって、成功のあるところには絶対に恵まれた環境があります。本当に孤立したら人も計画もつぶれます。孤独と孤立は違うのです。孤独なことはマリーにもたくさんあります。お姉さんやお母さんの死、そして最愛の夫の死。これは孤独です。だけど、この人はその生涯で一度も孤立していません。本当に孤立したら、こんな成功はできません。このふたつを混同するような言説には、それは相手がマリー・キュリーであろうが誰であろうが、われわれは非常に気を付けなければいけないだろうと思います。

こう考えると、100年以上前のワルシャワに生まれた天才科学者、という一見遠いところにいるように見えるマリー・キュリーの人生から、21世紀の日本に生きているわれわれも、いろいろと学ぶことはあると思います。私は女性の大学教員なので、教育、あるいは女性の社会的な進出ということを中心に考えますが、女性を孤立させるような状況というのは、絶対に女性を育てることにはならないと声を大にして主張したいと思います。

人である以上、孤独であったり、苦勞したり、努力が必要なのは当たり前です。けれども成功のための孤立なんてありません。それは、マリー・キュリーがいい証拠です。この人が成功したのは孤立していなかったからで、この人が持っていた支えみたいなものが、どれほどこの人の生涯において重要であったかというのを考えることが、われわれが自分たちの状況

を考えるよすがになるのではないかと思います。

ジェンダーの中身も変わるということも、マリー・キュリーの生涯を調べていて痛感しました。というのも、ポーランドの当時のジェンダーの概念とフランスのジェンダー概念、あるいはロシアのジェンダー概念は全然違います。また、18世紀と19世紀の服装の比較からもわかるように、男女の理想の在り方については、時代によっても変化します。

科学のイメージも同じことです。国家のスローガンになるときもあるし、あるいは孤独の象徴になるときもあるし、あるいは民族でもその価値が変わります。さらにこの「民族」というものも、普遍のものではありません。コペルニクスの時代の「ポーランド人」と、ショパンの時代の「ポーランド人」は同じ概念ではありません。コペルニクスの時代のポーランドには民族、あるいは国家という強い意識はありません。民族意識が強いのは、むしろショパンやマリー・キュリーの時代です。この地方の国境線の絶え間ない変化を見ていると、国家とは何なのかとつくづく思ってしまうます。これらも時代や場所とともに大きく変化していくものなのです。

したがって、マリー・キュリーの女性科学者としての成功というものは、以下のように考えることができると思います。彼女の個人的な状況は、常にそのときの政治的なこと——「政治」というのはいわゆる広い意味での政治です——とつながっている。つまりマリーは第二波フェミニズムのスローガンを典型的に表している例で、そうした「政治」が成功の方向にマリーを導いていったのではないかと思います。

だから、マリー・キュリーのことに限らず、われわれは広い視点を持って、さまざまな側面から、福島のことでも、女性と仕事のことでも、見ていく必要があるのではないかと思います。書きながらも、出版してからも、東日本大震災が起きてからも私が痛切に感じていることです。

皆さまにおかれましても、マリー・キュリーのこの話が、新しい視点から皆さまのまわりのできごとについて考えてくださる機会になるとうれしく思います。それから、湯浅年子のような、日本にも「日本のマリー・キュリー」と言われていた人もいたこと、つまり現実にはいろんな女性科学者がいることを知っていただきたいと思います。私の話が、こういう点

にも目を向ける機会になっていただけたらありがたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。

【注】

- 1) 湯浅年子『湯浅年子、パリに生きて』山崎美和恵編、みすず書房、1995年、173頁
- 2) 北原みのり『アンアのセックスできれいになれた?』朝日新聞出版、2011年、206-207頁
- 3) 山崎美和恵『パリに生きた科学者 湯浅年子』岩波書店、2002年、114-115頁
- 4) ミレヴァ・アインシュタインについては、デサンカ・トルブホヴィッチ＝ギュリッチ『二人のアインシュタイン』田村雲供、伊藤典子訳、工作舎、1995年参照。
- 5) ピエール・キュリー「放射性物質、特にラジウムについて」中村誠太郎、小沼通二編『ノーベル賞講演 物理学1、1901-1907』講談社、昭和54年、125頁